

2022年3月6日 礼拝説教要旨

詩編講解説教100「わたしたちは主のもの」

詩編100：1～5、ローマ14：7～9

先週3月2日（水）は「灰の水曜日」でした。今わたしたちは2022年のレント（受難節）の中を過ごしています。今年のレントにあつて、わたしたちはウクライナへの祈りを強くしたいと思います。2月24日に始まったロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻は日に日に激しさを増し、停戦協議も進展しないまま現在にいたっております。わたしたちはこのようなロシアの侵略行為に対して強く非難すると共に、今も戦禍の中、これに耐えて過ごしているウクライナの人々に祈りをもって心から連帯したいと思います。そしてこれ以上の犠牲がないように、一日も早い停戦とロシア軍のウクライナ領土からの完全な撤退、そして傷ついたウクライナの人々の癒しを祈り求めましょう。主がウクライナの人々と共におられ、御言葉によってウクライナの人々に慰めと希望が与えられるように共に祈りましょう。

わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。

神にわたしの救いはある。

神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。

わたしは決して動揺しない。

詩編62：2～3

（沈黙と祈り）

詩編第100編は礼拝への招きの御言葉として世界中の教会で親しまれている詩編であります。わたしたちの教会でも以前は詩編第100編を礼拝招詞として用いておりましたから覚えておられる方も多いでしょう。実際、この詩編は神殿における祭儀の場で、特に神殿に入場する際に歌われたのではないかと考えられております。2節に「喜び祝い、主に仕え、喜び歌って御前に進み出よ」とありますが「仕え」と訳された言葉（アーバド）は元々礼拝行為を表す言葉です。また4節に「感謝の歌をうたって主の門に進み、賛美の歌をうたって主の庭に入れ」とあります。「主の門」「主の庭」というのはいずれも神殿の門、中庭を指しておまして、人々が歌いながら神殿に入り、神さまの御前に進み出て礼拝をささげるイメージがあります。

注目していただきたいのは、4節には「感謝」という言葉が繰り返されています。詩編第100編の表題にも「賛歌。感謝のために」とありますから、この詩編の主題が「感謝」であることは言うまでもありません。つまり礼拝そのものが感謝であることをこの詩編は教えているのです。もちろんそのことは、今日わたしたちが神さまを礼拝することにも通じています。わたしたちが毎日曜日に礼拝をささげる動機は感謝です。強制されることではありません。また感謝も誰かから強いられることではありません。自分の心のうちに沸き起こるものです。ではどこからその感謝は生まれるのでしょうか。感謝の源は何でしょうか。

詩編第100編は、詩編の編纂をする中で95編から続く一連の「王の即位の歌」の最後に配置されたという説があります。古い王の支配が終わり、新しい王が即位された。そのような観点から100編を読みますと、新しい王の支配を喜び、王の前に進み出て接見し祝辞を申し述べる。そのような光景をイメージすることができます。そしてこの新しい王の支配をよく表している表現が「わたしたちは主のもの、その民、主に養われる羊の群れ」（3節）という言葉で

す。それまでは違う王に支配されていた。それは独裁者による力の支配だったのかもしれませんが。無理矢理従わせられていた。そこにはもちろん感謝はないでしょう。世界に目を向けてみれば、そういう王の圧政に苦しむ国民はたくさんいます。あえて名前を出す必要もないでしょう。戦争を引き起こした国の人々はどれほど自分たちの王の存在を恥じていることでしょうか。そこには怒りや憎しみはあっても喜びや感謝はありません。

しかしこのことは蚊帳の外の出来事ではありません。わたしたちもまた様々な支配に捕らわれていることを心に留めなければなりません。実際にこの社会の中で人間的な支配に苦しむということがあります。また様々な欲望に捕らわれ支配されていることがあります。現在のコロナ禍も一つの支配と理解することもできるでしょう。わたしたちはこのコロナ禍の二年間、どれほど不自由な生活を強いられてきたでしょうか。そしてわたしたちを苦しめる最大の支配が死の支配です。家族の死を経験する。また自分自身も身体を病み、また老いの現実と直面するとき、死の闇が自分を捕らえて離さないように感じるがあります。死という強大な力に首を押さえつけられ、身動きができない。そういう感覚に苦しむことがあるのではないのでしょうか。

けれどもそのような支配から解放され、新しい王の支配の中に入る。それはその新しい王のものとしてされることです。この詩編の背景にもバビロニア捕囚からの帰還と神殿再建があると言われますが、そこにイスラエルの人々が切に求めていたものがありました。それは他国の王の支配、異教の神々の支配ではなく、天地万物を造られたまことの神さまを礼拝することに他なりません。廃墟の中から神殿を再建し、ようやく礼拝をささげることができた喜びは、わたしたちの想像を絶するものだったに違いありません。「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ」（1節）それは全地、造られたすべてのものが喜びの叫びをあげるほどの大きな喜びがそこにあるということでしょうか。その喜びが感謝となり、神さまを礼拝することへ突き動かします。

そしてこの喜びをわたしたちも体験しているのです。それがイエス・キリストによる罪からの救いです。詩編100編には羊飼いのイメージがあります。「わたしたちは主のもの、その民、主に養われる羊の群れ」（3節）主イエスは言われました。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」（ヨハネ10：11）罪の中に迷い出たわたしたちのために主イエスはご自身の命を十字架でささげてくださいました。そのようにしてわたしたちを罪の支配ではなく、神さまのご支配のもとに連れ戻してくださったのです。その喜び、感謝がわたしたちを礼拝へと動かします。

詩編第100編を読みながら、『ハイデルベルク信仰問答』の問1を思い起こしております。

問1 生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答 わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。この方はご自分の尊い血をもって、わたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。

今、この世界情勢の中で、詩編第100編を読む意味を改めて考えます。この先、どんな人間的な支配がわたしたちを苦しめることがあっても、わたしたちがどのような脅威にさらされようとも、キリストがわたしたちを贖ってください、神さまのものとしてくださった救いは変わりません。その事実が最終的にわたしたちの人生を決定づけています。